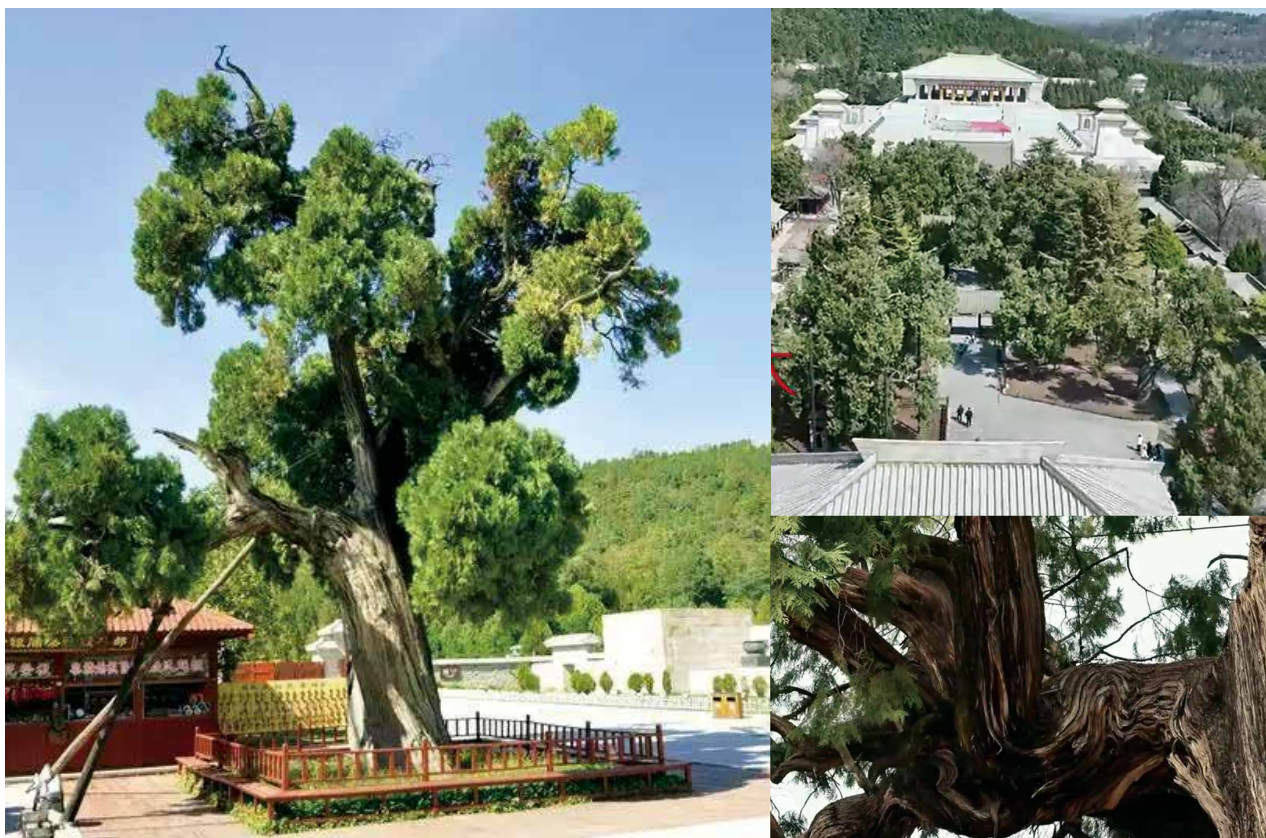


🌲 黄帝手植柏

中国“四大古樹”



陝西省の延安市黄陵にある軒轅廟に、「黄帝手植柏」（柏樹：ヒノキ科のビャクシン）と呼ばれる古木があります。樹齢は5000年ともいわれ、高さ19mを超えるその姿は、長い時の流れを静かに抱え込んでいるように見えます。伝説によると、黄帝が橋山に都を置いたころ、民は家を建てるために森を伐り続け、山々はすっかり裸になってしまい、ある豪雨のあと、黄帝が山に登ると、木を失った丘は水を支えきれず、全てが流され、自然の荒れようを目にした黄帝は、伐採を禁じ、植樹をすすめ、自らも柏樹を植えたと伝えられています。これが、いま目の前に立つ巨木の始まりだといわれています。5,000年の風雪をくぐり抜けてきたこの樹木は、ただの古木ではなく、人と自然がどう向き合うべきかを、静かに語り続ける存在として、今もそこに立ち続けています。

◎特集 2026年度定期総会を開催

- 中国の世界遺産を巡る 上海事務所 石川所長
- タイムスリップ 静岡と浙江が歩んだ時代
- 中国が描く未来産業
- 日中が生んだ奇跡の物語 新城長有と袁隆平が拓いた“ハイブリッド米”

静岡県日中友好協議会 2026 年定期総会を開催 しっかり交流を進めていくことが重要

5月14日、ホテルグランヒルズ静岡において、当協議会の2026年度定期総会を開催しました。総会では、昨年度の事業報告および収支決算を承認するとともに、本年度の事業計画と収支予算を決定しました。日中関係が冷え込み、相互訪問が思うように進まない状況が続いていますが、このような時期だからこそ、地域や民間による「顔の見える交流」を大切に、関係を途切れさせないことが将来に向けて大きな力になることを確認しました。



静岡県日中友好協議会 鈴木康友会長挨拶



静岡県と浙江省の交流は長い歴史を持ち、経済・農業・文化・教育など多様な分野で着実に積み重ねられてきました。私自身も昨年6月の知事就任後、初めて浙江省を訪問し、王浩書記と直接意見を交わす中で、顔の見える信頼関係を築くことができました。

この訪問では、浙江大学・静岡大学・静岡県立大学・静岡県の四者によるスタートアップ育成交流の覚書を締結し、昨年の特産品静岡には浙江省から複数のスタートアップが参加するなど、実りある交流が進んでいます。また、県の取組に加え、文化やスポーツ、市民レベルでの交流が広がっていることも大変心強く感じています。

一方で、日中関係は依然として慎重さが求められる状況にありますが、こうした時期だからこそ、地域同士の交流が重要な役割を果たします。先日は中国大使館で呉江浩大使と懇談し、友好の絆を改めて確認しました。来年は浙江省との友好45周年の節目を迎えます。これまでの交流をさらに発展させられるよう、万全の態勢で取り組んでまいります。

来賓・静岡県議会中田次城副議長祝辞

本県と中国、特に浙江省との交流は、経済・教育・防災など多岐にわたり、協議会の皆さまには日頃からその発展に大きく貢献していただいています。

2025年には、本県に宿泊した訪日外国人のうち約40%が中国からの旅行者であり、多くの方に静岡を訪れていただいていることを大変喜ばしく感じています。

人と人が行き来し、言葉を交わし、互いを理解することは、良好な関係づくりに大きな力を発揮します。国家間には依然として課題もありますが、地域・企業・個人の交流は別の次元であり、今後も積極的に続けてまいります。

静岡県と浙江省が友好を深め、固く手を結ぶことは、日中両国、さらにはアジアの平和と発展にとっても重要です。県議会としても、さまざまな機会を通じて信頼の絆を一層強めていく所存です。協議会の皆さまにおかれましても、引き続き両国の友好発展にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。



来賓・三島市鈴木昭彦副市長祝辞

静岡県日中友好協議会は、1979年の設立以来、県内自治体や関係団体、企業と連携し、中国・浙江省との交流を積極的に進め、大きな成果を上げてきました。この長年のご尽力に深く感謝申し上げます。

現在の日中関係は国際情勢の影響もあり厳しい局面にありますが、こうした時期だからこそ、自治体や民間による「顔の見える交流」が将来に向けて大きな力になると考えています。文化やスポーツ、地域経済など、協議会が担ってきた役割は非常に重要であり、相互理解の促進にも大きく寄与しています。

三島市では来年、麗水市との友好提携30周年を迎えます。今年8月には公式訪問団の派遣を予定しており、昨年は雑技団の来訪を通じて市民との交流も深まりました。今後も浙江省との交流を継続・発展させていくため、皆さまのご協力をお願い申し上げます。



中国には60もの世界遺産があるのをご存知ですか？本シリーズではその中でも特にユニークな遺産を深掘りしてご紹介します。



県上海事務所
石川祐介所長

北京中軸線—中国が理想とする都城秩序の傑作

北京中軸線—「線」が表す儒教の世界観

2024年7月、「北京中軸線：中国が理想とする都城秩序の傑作」がユネスコ世界文化遺産に選ばれました。単なる歴史的な建築物ではなく、儒教の概念が都市機能として表現されて現代に至る遺産であることが評価されました。

大切なものを「線」に沿って配置する

この遺産の最大の特徴は「線」による街づくりです。エルサレムやパリなど歴史上の主要都市は、聖なる神殿や王宮など街の「中心」から放射線上に広がった街づくりをしています。しかし、北京は、天、皇帝、市民の住む場所を線として配置しているのが特徴です。北は市民が暮らす場（鐘鼓楼を中心とする商業街）、中央は皇帝の領域（紫禁城：現在の故宮）、南は中軸線を対称線として左右に天と農を祭る聖域（天壇、先農壇）が配置されて、一本の線を中心に、街の機能が配置されているのです。

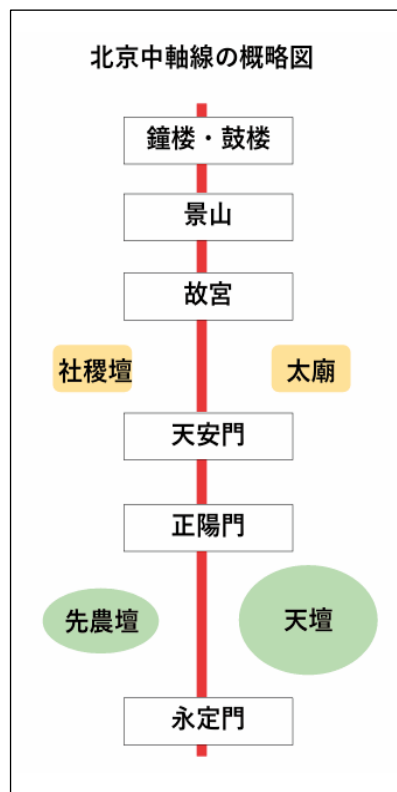
北京の中軸線を築いたモンゴル王朝

この中軸線の概念は、長安など他都市で以前から取り入れられていましたが、北京の街づくりにあたってこの概念を取り入れたのは、モンゴル民族の元王朝だと言われています。



景山から眺める故宮

元王朝の皇帝だったフビライ・ハンは、自らはチベット仏教を信仰していましたが、統治のためには庶民に広がる儒教を活用することにしました。そこで参謀で儒学者でもあった劉秉忠の献策により、儒教の経典『周礼』に描かれた理想の都の建築を目指します。儒教では「規則的で対称的なバランスを保っている状態」が調和のとれた理想像と考えられていました。このため線の各所に天、皇帝、市民の居場所を配置することで、最も調和の取れた街の姿を体現したのです。この手法は、その後の明、清、そして現代にも受け継がれていきます。

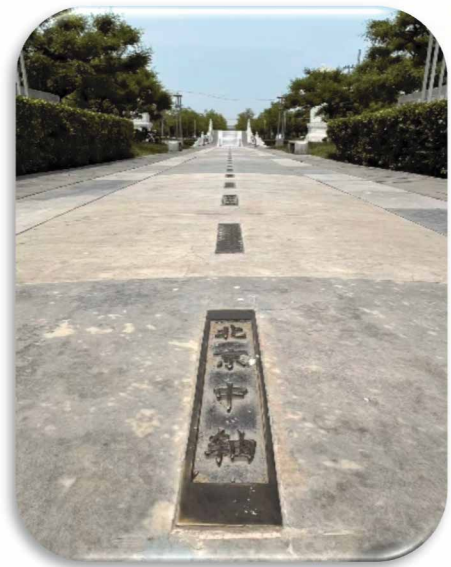


時代ごとに書き換えられてきた「生きた遺産」

ユネスコに評価されたのは、中軸線を「過去の遺物」で終わらせなかった点です。王朝が変わっても、「1本の線上で都市のバランスを保つ」考え方は、形を変えながらも引き継がれていきました。

そして現代、中華人民共和国になった今も中軸線の北側には「鳥の巣(国家体育場)」が、南側には「北京大興空港」が作られました。

中軸線に沿って人が集まる場所を配置したのは、この思想を踏襲していると言われます。北京の街は、儒教が理想とする「調和」の姿を時代ごとに発展させながら、700年後の現代にも受け継がれているのです。



実際に歩いて体感する「秩序の美」

中軸線は直線距離で 7.8 km ですが、実際に歩くと故宫や天安門など入場制限のため迂回が必要な場所もあり、各構成遺産に立ち寄っていけば実際は 15~20 km を歩きます。それでも 2024 年に世界文化遺産に認定されてから、このルートは中国現地でも大変な人気で、土産店の店主は、今や北京の3大名物は「万里の長城、北京ダック、北京中軸線だ」と笑います。景山、天安門、天壇などの構成遺産は、それぞれが深い歴史的な背景を持つ観光地ですが、これらの中軸線に沿って歩いて回ろうとする人が増えているのです。



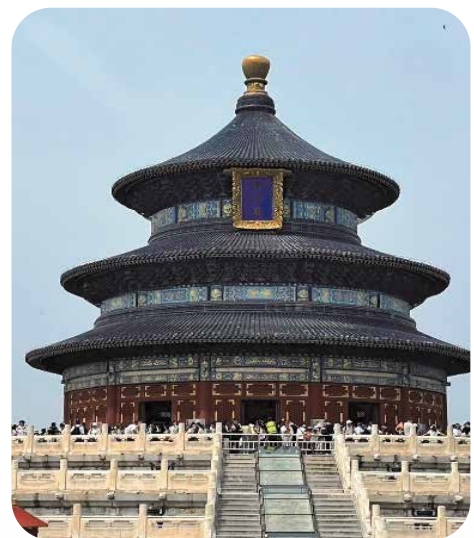
正陽門の前に広がる前門大町



北京名物！羊の串焼き！

天、皇帝、市民の調和を目指して作られた街並は、今も大きく変わることなく北京の中心部を貫いています。700年の歴史に触れる「線の旅」に、あなたも出かけてみませんか？

早朝に北側の鐘楼・鼓楼をスタートすると、景山の頂上から、故宫の黄金の屋根が中軸線に沿って整然と並ぶ様子は圧巻です。厳重な警備が敷かれた天安門を横目に歩きながら正陽門の南に広がる前門大街に達すると、賑やかな商売人の声が聞こえてきます。威勢の良い呼び込みにつられて羊の串焼きを購入し、小腹を満たして南下すると天壇が鎮座しています。年に一度だけ皇帝が天と対話を交わした空間で心を落ち着かせ、夕暮れに永定門にたどり着けばゴールです。



皇帝が天と対話した天壇

タイムスリップ 静岡と浙江が歩んだ時代

— 1982年の友好提携から2027年へ —



第1回 1980年代：好奇心が国境を越えた時代

1982年、静岡県と浙江省が友好提携を結んでから、来年で45周年を迎えます。振り返れば、両地域を取り巻く環境は大きく変化してきました。しかし、その出発点にあったのは、互いを知ろうとする素朴で力強い好奇心でした。互いを知りたい、学びたい、その純粋な思いが、静岡と浙江の交流の土台をつくった時代でした。

■ 日本：プラザ合意とバブル前夜

1985年のプラザ合意により円高が急速に進み、為替は1ドル250円から125円へと半減しました。円高不況を避けるための金融緩和が、のちにバブル景気の導火線となります。携帯電話が登場し、ボディコンやワンレンが街を彩り、地上げ屋が暗躍し始めるなど、社会全体が「加速」し始めた時代でもありました。

■ 中国：改革開放の胎動

一方の中国では、改革開放政策が始まったばかりで、市場経済への移行が本格化しつつありました。人民元の為替は1元120～150円から1987年には38円へと大きく変動し、輸出拡大の追い風となりました。街には自転車があふれ、海外製品はまだ珍しい存在でした。北京にケンタッキーフライドチキン1号店が開店し、長い行列ができたのもこの頃です。「外の世界」が一気に押し寄せてきた時代だったと言えます。

■ 静岡と浙江：熱気に満ちた草創期

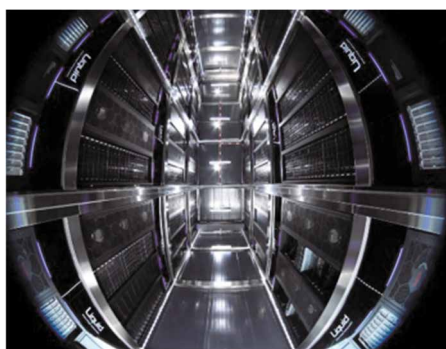
1982年、友好提携を記念して静岡市で開催された「**中国浙江省展覧会**」は19日間で50万人の入場がありました。扇子、木刻、青磁などの工芸品、農水産物の展示に加え、曲技団や武術団の公演、即売会まで揃う大規模イベントで、当時の静岡県の中国への関心の高さがうかがえます。青年交流も非常に活発でした。1982年の「青年の船」では470名を超える若者が浙江省を訪問し、1987年には「友好の翼」で354名の中高生が浙江省の同世代と交流しました。今では考えられないほどの規模の交流です。浙江省は静岡県を「兄」と呼び、技術提携や研修生派遣を積極的に進めていました。1985年には県内企業が寧波に白板紙工場を稼働させる契約を結び、また1987年には西湖湖畔を走る市民参加型の「**西湖モクセイマラソン大会**」が初開催され、地方が発信する日中友好の象徴となりました。



中国が描く未来産業 「量子情報」

中国政府が掲げる「未来産業」とは、まだ産業化の初期段階にあるものの、最先端技術によって大きく成長すると期待される新しい産業群を指します。2024年1月には、工業情報化部など7省庁が『未来産業の革新的発展の推進に関する実施意見』を発表し、「未来製造」「未来情報」「未来材料」「未来エネルギー」「未来宇宙」「未来健康」の6分野を重点領域に決めました。この中でも「未来情報」は、量子情報、6G、人工知能など、次世代の情報技術を担う分野です。特に**量子情報**は、従来の限界を超える計算能力を実現する“鍵”として注目されています。

合肥市が量子情報で先行する理由



中国では量子情報関連の産業区や研究開発拠点の整備が進んでいますが、その中心地の一つが安徽省の合肥市です。合肥は早くから量子技術に投資し、研究・産業の両面で国内をリードしてきました。**量子研究の中核「量子計算合肥市技術革新センター」** 2022年に設立されたこのセンターは、中国で初めて量子情報技術を専門に扱う研究所です。量子計測・制御技術、超伝導量子チップの改良、量子コンピューティングの応用開発、量子クラウドサービスなど、量子技術の基盤づくりを進め、重要技術を次々と確立しています。**産業集積が進む「合肥量子科技省未来産業先導区」**

安徽省が2024年に計画した未来産業推進地区の一つで、省と市が合わせて1億元以上を投じたと言われています。量子通信・量子計算を中心に、約30社の中核企業と60社以上の関連企業が集まり、2024年の売上高は約40億元。2027年には50億元規模を目指しています。

量子×スーパーコンピュータ「巢湖明月」



「巢湖明月」は、合肥市大数据資産運営有限公司が整備した量子計算プラットフォームです。もともとスーパーコンピュータ基地として稼働していましたが、ここに180量子ビット超の量子コンピュータ2台と、12ビットのイオントラップ型量子コンピュータ1台を追加。2026年1月に正式稼働し、量子とスーパーコンピュータを融合した新しい計算環境が整いました。**国有企業による量子サービス「中電信量子信息科技集団」** 2023年5月に合肥で設立された、中国電信100%出資の国有企業です。量子通信・量子コンピューティング・量子計測の3分野を網羅し、「量子暗号通信」や「量子クラウド印鑑」などのサービスを行政・金融・医療・エネルギー分野へ提供しています。

量子情報はどこで役立つのか

量子技術はすでに実用化が進み、日常生活に近い領域にも広がっています。**医療**: 新薬候補の探索精度が向上し、開発期間の短縮が期待される、**金融**: 高速取引やリスク予測の精度向上、**自動運転・低空経済**: 高精度の位置情報が活用され、安全性が向上、こうした量子コンピューティングは、もはや研究室だけの技術ではなく、社会のさまざまな場面に浸透し始めています。

新城長有と袁隆平が拓いた“ハイブリッド米”



世界の人口が80億人を超えた今日、「食べる」という当たり前の行為が、実はどれほど脆い基盤の上に成り立っているのか——私たちはいま、その現実を突きつけられています。こうした時代にこそ、一粒の種が世界を変えた物語を振り返る意味があります。沖縄で孤独に理論を磨いた新城長有、そして中国で飢餓と向き合いながら実用化に挑んだ袁隆平という、二人の研究者の情熱が結びついて生まれた奇跡の物語がありました。彼らの執念と国境を越えた協力が世界を救った“ハイブリッド米”という革新を実現させました。

第1回：稲作研究者・新城長有が蒔いた「理論の種」

沖縄の陽射しの下で、一人の研究者が見ていた未来 その第一歩は、1960年代の沖縄から始まります。当時の日本では、米はすでに余り始めていました。稲作研究の主流は「より美味しく」「より高級に」という方向へと傾き、増産の必要性は薄れていました。そんな時代に、琉球大学の一角でまったく逆の方向を見つめていた研究者がいました。新城長有です。新城氏は、沖縄の強烈な陽射しの下で、野生イネと栽培イネを掛け合わせる地道な実験を繰り返していました。芽が出るか、花が咲くか、種が実るか——その一つひとつを確かめる作業は、華やかさとは無縁でしたが、彼は黙々と続けました。「野生の中に、未来の稲作の鍵がある」と信じていたからです。



世界初の発見—イネの“花粉をつくらない株” ある日、新城氏は奇妙な株に出会います。花は咲くのに、花粉がない。受粉できない。つまり、細胞質雄性不稔という特異な性質を持つ株でした。これは世界で初めて確認された現象でした。新城氏は、この性質を丁寧に解析し、のちに「三系法」と呼ばれる理論を確立します。雄性不稔株(A系)、その性質を回復させる株(R系)、そして中立の株(B系)。この三つを組み合わせることで、大量の雑種第一代(F1)を安定して生産できるという画期的な方法です。今日、世界のハイブリッド稲作の基礎となっている理論は、沖縄の小さな実験圃場から生まれました。

しかし、日本では必要とされなかった 高度経済成長期の日本では、米は余っていました。「毎年、農家が種を買わねばならない米など不要だ」そんな声が、彼の研究を押し返しました。新城氏の理論は、学会の片隅に置かれたまま、誰にも使われず、誰にも読まれませんでした。彼は孤独でしたが、理論そのものは静かに息をしていました。眠ってはいたものの、死んではいなかったのです。

海の向こうで、誰かが“増産”を願っていた 日本では不要とされたその理論を、切実に求める国々がありました。人口が急増し、食料が足りず、「一粒でも多く収穫したい」と願う人々が、アジアにもアフリカにも広がっていたのです。沖縄の陽光の下で新城氏が蒔いた“理論の種”は、やがて海を越え、別の大地で芽を出すこととなります。

発行所：静岡県日中友好協議会 発行人：増井浩二

静岡市葵区追手町44-1(静岡県産経会館1階) TEL:054-255-8111

※「NEWS LETTER」は、当協議会HP (<http://www.japanchina-shizuoka.jp/>) でも閲覧できます。